

作物名：りんご
病害虫名：褐斑病（病原：*Diplocarpon mali*）



写真1 葉の病徴



写真2 発生樹の状況

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に葉に発生するが、多発時は果実にも発生する。
- 葉では、果そう葉や新梢基部葉から発生が始まる。初期病斑は、斑点落葉病に酷似した数 mm の円形紫褐色病斑を形成し、その後、拡大融合して褐色不整形の大型病斑となる。やがて、褐色の病斑周囲に緑色を残し、これ以外の部分が黄変し、早期落葉する。病斑内に小黑粒（分生子堆）が形成されることで斑点落葉病と区別できる。
- 果実では、梗あ部から肩部に多く、9月中旬頃から発病が始まる。円形～楕円形の黒褐色小斑点を生じ、病斑上には小黑粒（分生子堆）が形成される。

2 伝染源及び伝染方法

- 本菌は被害落葉上に子のう盤を形成して越冬し、5月初旬～7月下旬にかけて子のう盤から子のう胞子を飛散し、これが第一次伝染源となる。宮城県における子のう胞子の飛散盛期は5月中旬～6月中旬で、降雨日には飛散量が多くなる。
- 発病葉の病斑には分生子が形成され、雨滴により二次伝染を繰り返す。

3 発病・伝染好適条件

- 本菌は糸状菌の一種で、子のう菌類に属し、気温 20～25℃で多雨条件が感染に好適であるため、夏期が冷涼多雨な年に発生が多い。
- 葉での発病は通常6月中旬頃から始まる。果実での発病は9月中旬頃からである。
- 発生は晩夏～初秋にかけて増加する傾向がある。

4 防除方法

- 密植園や枝が混み合っている樹では薬剤の散布ムラが生じやすく発生が多くなるので、徒長枝など不用な枝を整理し、薬剤のかかりを改善する。
- 被害葉は第二次伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 開花期前後から9月上旬頃まで、黒星病や斑点落葉病と同時に定期的に薬剤防除を実施する。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編第7巻（農文協）
- 普及に移す技術第83号（宮城県）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

(令和5年9月改訂)